故大庭昭博先生を送る言葉

院長　深町正信

「あなたがたに神の言葉を語った指導者たちのことを、思い出しなさい。彼らの生涯の終わりをしっかり見て、その信仰を見倣いなさい。イエス・キリストは、きのうも今日も、また永遠に変わることのない方です。」（ヘブライ人への手紙　第13章7、8節）

2006年4月4日、私たちが日ごろ敬愛してやまなかった大庭昭博先生は、地上での58年間のご生涯を終えて、主の御許に召されてゆかれました。私は、青山学院大学経営学部宗教主任・教授でありました大庭先生を送る言葉と、大庭先生への感謝の言葉を、青山学院を代表して述べさせていただきます。

先生が召される1週間程前に、東方大学宗教部長から大庭先生が入院されていることを電話で知らされ、一日も早いご回復を祈るとともに、大庭先生が充分に療養してくださるようにお願いしました。そして、既に大庭先生の担当する講義を代行する非常勤の手はずがなされたことを知らされ、少しほっとしたところでした。ところが4月4日の朝に再び電話があり、大庭先生の容態が急変し、今朝病院でお亡くなりになったと聞き、先生の死の事実に愕然といたしました。この日は、青山学院女子短期大学、大学、大学院の入学式の日でしたが、私はいろいろと生前の大庭先生のことを不思議に思い起こしておりました。

大庭昭博先生は、司式者のお言葉にありましたが、1997年に青山学院大学経営学部の関田寛雄先生の後任として、宗教主任・助教授としてご就任になりました。そして、2年後に教授となり、学部のため、また、青山学院大学全体の教育の実践と研究のために、宗教主任としてご尽力くださいました。

2001年11月7日に行なわれた青山学院創立127周年記念礼拝では、ヘブライ人への手紙第12章1～3節をテキストに、「地上の証人たち」と題して心を

込めた礼拝説教をしてくださいました。大庭先生は、「第三ミレニアムの時代、大学教育のみならず、中等、初等、幼児教育においても、新しい改革が求められている。もしそれを受け止めることが出来ないとするならば、それはある意味で、伝統に対する怠慢であろう。私たちはこの青山学院の歴史において、多くの証人たちの群れに囲まれている。その証人たちの遺産を受け継ぎながら、現在の証人として、私たちは古い革袋を解釈し直して、新しい革袋を用意していかなければならないのである」とその説教を結ばれました。

大庭先生は大学の教員として、教育・研究の仕事、学部の仕事、キリスト教推薦入学生の指導を熱心にしてくださり、また、大学宗教主任としては、宗教センターのハンドベル・クワイアと第二部聖歌隊の担当チャプレン、フォーカス・グループの指導等を熱心になし、あるときは、学生たちと共に伝道演奏旅行に出掛けられ、その演奏旅行の記録をビデオにとり、わざわざ私にも届けてくださいました。

1998年には、これまでの教会を中心とした社会的実践とボンヘッファー研究をまとめた『社会倫理と霊性』と題する書物を出版されました。

また、大庭先生は、「社会倫理」と「霊性」という二つの視点から、青山学院大学総合研究所キリスト教文化研究センターのプロジェクト代表として共同研究をまとめておられます。前者については「民族主義とキリスト教」というプロジェクトがあり、その成果は同名の書物として2003年に新教出版社から発行されました。大庭先生は、そこでボンヘッファーについて論じていますが、プロジェクト代表として、聖書学から現代神学までカバーする研究者を集め、非常に多角的なアプローチをされています。特に、大庭先生は佐竹明先生のもとで新約学を学ばれた関係で、聖書学に深く根ざした現代倫理を構築しようとしていたように思われます。

後者の「霊性」に関しては、この3年間の「キリスト教の霊性」研究プロジェクトがあります。大庭先生はそこで広い人脈を活かして、聖書学から現代の諸問題までを取り扱う共同研究をプロジェクト代表としてリードされていました。その研究成果は途上にありましたが、一昨年『キリスト教のスピリチュア

リティ　その二千年の歴史』という大著を共同で翻訳することを具体化され、それが今年4月21日に出版される予定であると聞いております。この本は、イギリスを中心とする学者の、新約時代から始まりインターネット時代までをカバーする、画期的な「霊性」の歴史に関する書物であります。残念ながら、これが大庭先生の最後の仕事となりました。

このように、大庭先生は、深い霊性に根ざしたキリスト教社会倫理を探求していた研究者でありました。また、それを一人でなく多くの研究者との共同研究という仕方で為そうとしたことは、大庭先生の信仰と人柄と研究姿勢を端的に表わしていると言えましょう。

青山学院大学宗教主任の紀要には、「信従の倫理的判断基準」、「W. フーバーの法倫理」、「マルコ福音書のエクスーシア」、「社会倫理再論（1)」、「社会倫理再論（2)」、「社会倫理再論（3)」、「ボンヘッファーの説教」等を書いておられます。

特に、最近はご自身がフランスのブルゴーニュ地方にあるテゼ共同体を訪れて、テゼの賛美と祈りに深い関心を示され、是非一人でも多くの学生を連れて再び参加したいと語っておられました。実際に、先生はテゼ共同体のブラザー・ギランを青山に迎えて、素晴らしい「テゼの賛美と祈り」を、自分探しをしている学生たちにも体験させる機会を持たれていました。

2005年8月の『キリスト新聞』に、大庭先生が東京基督教大学の稲垣久和教授と「国立追悼施設をどう考えるか」というテーマで4回にわたり対談をされた興味深い記事が載っていましたが、その最後に先生は、「私たち一人ひとり、それぞれの教会と礼拝を中心とした信仰生活をしていくと同時に、この世に派遣される民として、他者との豊かな共生のために、その責任を果たしていきたいと思います」と結んでおられました。

今日まで、夫として、父親として、伝道者として、研究者として、また、教育者としてご生涯をかけた大庭昭博先生と共に地上における信仰の歩みをされ、また、先生の働きを背後にあって支えてこられました、百合夫人と二人のご子息たちの上に、主の豊かな平安とご加護がありますように、ご参列の皆様

と共に心からお祈り申し上げ、私の先生の思い出の一端と、大庭昭博先生の良きご指導に対する感謝の言葉とさせていただきます。

（告別式弔辞　2006年4月5日　於 渋谷教会）